伊藤千代子の死

東栄蔵

未來社

栄蔵

藤千代子の死

未來社

伊藤千代子の死

一九七九年一〇月三一日　第一刷発行
一九八〇年　四　月二五日　第二刷発行

定価　一五〇〇円

©著　者　東栄蔵

発行者　西谷能雄

発行所　株式会社　未来社

東京都文京区小石川三―七―二
電話〇三（八一四）五五二一番
振替・東京七―八七三八五番

本文組版＝ふじ活版
本文印刷＝萩原印刷
製　本＝今泉誠文社

伊藤千代子の死

目次

伊藤千代子の死　7
高橋くら子と長野県水平運動の創立期　55
高橋くら子論をめぐる余聞　95
山室静と高原学舎　123

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

『飼山遺稿』にみる明治末の一中学生像　149
信州のふたりの女学生　163
現代女子高校生と戦争文学　191
あとがき　247
初稿発表覚書き　254

伊藤千代子の死

伊藤千代子の死

一

歌誌『アララギ』の昭和十年十一月号に、土屋文明は、「某日某学園にて」と題した次のような一連の短歌を発表している。

語らへば眼(まなこ)かがやく処女(をとめ)等に思ひいづ諏訪女学校にありし頃のこと
清き世をこひねがひつつひたすらなる処女等の中に今日はもの言ふ
芝生あり林あり白き校舎あり清き世ねがふ少女(をとめ)あれこそ
まをとめのただ素直にて行きにしを囚(とら)へられ獄に死にき五年(いつとせ)がほどに
こころざしつつたふれし少女よ新しき光の中におきて思はむ
高き世をただめざす少女等ここに見れば伊藤千代子がことぞかなしき

私は、戦争のなかの少年の日に、私の先生であった安良岡康作の導きで、アララギ短歌会に入会し、土屋文明の選を受けるようになった。そして土屋文明の作品をいろいろ読んでいくうちに、歌集『六月風』のなかでこの連作に出会い、強く心惹かれたことを思い出す。

土屋文明の短歌には、少年の私なりに心に残ったものがいくつかあったが、この「某日某学園にて」の一連の作品から受けた感動ほどさわやかなものはなかった。それは、カーキ色の思想につつみこまれていた少年の日の私にとって、親にも教師にも語ることがはばかれるような秘密めいた感動でもあった。そしてその感動の軸は、短歌作品の背景に潜む一少女のドラマチックな死をめぐる、思想の自由を閉ざされていた少年の切ない感傷でもあったようだ。

戦争が終ってしばらくして私は、短歌の創作からは遠ざかってしまったが、開かれてきた新しい光のなかで、「某日某学園にて」の短歌にひそむ伊藤千代子の死とその時代の背景に対する関心は、この少女の死を詠んだ土屋文明の人と思想への関心とも重なって、かえって増幅していった。

以来、少しずつ伊藤千代子のことを調べてきたが、その早い死が、治安維持法下の死であったがために、千代子の短い生涯を明らかにすることはなかなか困難な作業であった。しかし、この埋れている無名の少女伊藤千代子の死にいたる軌跡を明らかにすることは、歌人土屋文明の思想の断面を照射することでもあり、さらにひとりの少女への愛惜をこえて、「こころざしつつたふれし少女」たちの生きた時代を、民衆史のなかから明らかにすることにもつながることだろうと、考えられる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二

伊藤千代子は、明治三十八年七月二十一日に、諏訪湖の南にある長野県諏訪郡湖南村真志野（現、諏訪市湖南）の農家に、伊藤義男・まさよを両親として生まれた。諏訪市役所湖南支所の除籍簿によれば、母まさよは明治二十年一月十二日に諏訪郡中洲村中金子の岩波久之助の長女として生まれ、明治三十七年十一月二十三日十七歳のとき、子どものなかった伊藤義勇・よね夫妻の養子になっている。そして、翌明治三十八年七月十五日に、東筑摩郡四賀村の赤沼茂十郎の四男義男を婿養子として迎えている。義男は明治二十一年六月二十二日生まれだから、まさよより一歳年下で、そのとき十七歳であった。ふたりの結婚届が出された六日後に千代子が生まれ、その出生届が出されている。

これに拠れば、まさよは、伊藤家と養子縁組をする前に、すでに千代子を妊っていたことになる。伊藤家は旧い家柄で湖南に広い土地をもっており、養父（千代子にとっての養祖父）の伊藤義勇は、のちに村長をつとめたりしたほどなので、貧しい農家の四男だった義男が人手のない伊藤家に雇われていて、中洲村のまさよと相愛の仲になったのではないかとも推測される。

しかし千代子が二歳になった明治四十年二月二十日に、母まさよは病気のため二十歳の若さで亡くなっている。そしてその一年後の明治四十一年二月十七日に、若い父義男は協議離縁となり、幼い千代子を残したまま伊藤家を去っている。以来、千代子は養祖父母に育てられるが、人のよい養祖父伊

藤義勇は多くの人の連帯責任者となったことが原因で、広い土地のほとんどを失ってしまい、大正二年二月十日千代子が湖南小学校二年生のときに亡くなるという不幸が続く。養祖父の死後養祖母よねと千代子のために小さな家が建てられ、人手に渡ってしまった大きな家からふたりはここに移り、養祖母は駄菓子屋をやって細々と暮らすようになる。

この様子を見かねたまさよの実祖父母岩波久之助とたつは、孫の千代子をわが家に引き取って育てることになり、こうして千代子は小学校三年のとき、母の実家から諏訪郡中洲村の小学校に通うようになる。中洲村中金子の母の実家には六歳年下のいとこ岩波八千代（まさよの兄岩波又治の長女）がいて、ふたりは実の姉妹のように育てられる。岩波八千代は私の問いに対して、「千代子姉とは、小さいころから実の姉と思って一緒に育てられてきました。私にはすなおないい姉さんで、何でも相談し何でも半分分けあってきました」と述懐しているが、このことばから、夜中に目がさめてよくおびえたという千代子もまた、実祖父母といとこ八千代との温かい生活のなかで、ようやく幼い心に安定をとりもどしていったことがうかがい知られる。しかし、千代子のいたいけな心に焼きついた湖南村での変転は、その心の深層に消えにくい影をのこしていて、もともと体があまり丈夫でなくて、神経質だった千代子を、内攻的にしていったようである。

転校した中洲小学校の同級生には、のちに著名な作家になる平林たい子がいた。そして千代子もたい子も成績抜群で、いつも競いあっていた。たまたま五年生になった彼女たちの受持ちとして赴任してきた教師は、のちに信州教育界のすぐれた指導者となる若き日の上条茂であった。上条から受けた影響については、平林たい子自身がのちに話したり書いたりしているが、大正デモクラシーの底流す

る信州教育界の若きひとりの教師としての上条は、当時は反戦的な立場に立っており、教科書も国定教科書を重く考えず、専攻は数学であったが、外国の文学などについても情熱をもって語ったという。この影響で平林たい子は、小学校の教師をしていた姉の良人の書棚にあったドストエフスキーやトルストイなどを読み、とくにクープリンの『生活の河』やゴンチャロフの『オブローモフ』はくりかえし読んだという。これは上条の個性的な教育が平林たい子の才能を刺激した結果であろうが、このことは伊藤千代子についても当然言いうることであって、感受性の強い千代子が、たい子以上に上条らの影響をその内面で受けとめ、他の子どもたちよりもするどくものを見る素地を育てていったことと思われる。

三

中洲小学校を卒業した伊藤千代子は平林たい子とともに、大正七年四月、前年に町立から県立に昇格したばかりの諏訪高等女学校に入学した。千代子の学籍簿には、戸主が千代子自身で、後見人伊藤よね、保証人岩波又治と記されている。土屋文明が、島木赤彦の世話で諏訪高女の首席教諭として赴任してきたのはこの年であった。そして大正九年三十歳で三村安治校長のあとを受けて校長となり、大正十一年三月、伊藤千代子らが卒業したあと松本高等女学校長に転じている。「相ともにありし四年の何時の日かやなぎの絮（わた）のいたく飛びにき」という歌をのちに文明から贈られた武井伊平は、当時諏訪

高女の歴史の教師だった。その武井や当時の教え子たちによれば、土屋文明は教諭時代には英語の授業を担当し、きびしい教え方で生徒に接したが、その若々しい熱意と厳格さは、「きつい先生だけれどもいい先生だ」という印象を、いまでも往時の生徒たちに残しているという。文明は校長になってからも、最上級の四年生の修身を週一回受け持ったが、国定教科書を使わず、そして徳目を説く授業などは全くやらず、もっぱら芭蕉の『野ざらし紀行』や『奥の細道』などを講義したが、その豊かな講義は、女生徒たちにたいへん魅力的だったという。

米田利昭の『土屋文明』（勁草書房）には、諏訪での文明の姿がかなり詳しく書かれている。武井伊平らからの聞き取りと併せて、校長としての土屋文明をさらにみてみよう。文明は、生徒に力をつけること、教科の内容を高めることをきびしく推し進めたが、生徒に成績簿というものは出さなかったし、勉強は学校でし、家庭では家事を手伝わせるという実質主義であったという。また諏訪湖一周や霧ケ峯などへの月次遠足を行なったが、生徒は手ぬぐいをかぶり袴を短くしてわらじばきで歩き、弁当はにぎり飯と、学校で配るキャラメル一箱か夏みかん一個だけだったという。そして冬は諏訪湖の結氷期に全校で下駄スケートに行くことを奨励するなど、質実できびしい指導をしたという。また諏訪は製糸業の盛んな土地だったが、製糸家の娘には絹ものを着てくるのを許さなかったのは、貧富の差を教室にもちこませないためであったという。

しかし、ある遠足のとき、道にいた馬のわきに立って手綱を持ち、全部の生徒が通りすぎるまで立っているなどの、やさしさの反面をもった校長ぶりだったという。

土屋文明はまた外に向かっては教育への干渉に抗しながら、内に向かっては教師ひとりひとりの個

性を認めて自由に勉強させた。――中洲小学校で伊藤千代子らを教えていた若き清水多嘉示のひそめていた資質を見ぬいて諏訪高女に招き、図画教育に新風を吹きこんだり、教師たちに輪番で卒業生に講話させることで研究の刺激と機会を与えたり、図書はどんどん買い入れさせて合評会をやったり、また研究記録というノートを職員室に下げておいて、誰でも自由に調べたことや疑問点などを書き合うことによって、ひとりの勉強がみんなの収穫になるようにしたという。このような諏訪高女の雰囲気のなかで、独学で理学博士になった千野光茂のような教師も出ることになる。これらのエピソードから、学問を通して教育を考えさせようとした土屋文明の姿勢がうかがい知られる。

当時、信州白樺運動は教育の分野に花ひらいていて、その理想主義がとくに青年教師たちをとらえていた。諏訪郡下での大校だった高島小学校でもそして諏訪高女でも、教条的な校訓は設けず、職員で議論を尽して方針をきめるという、形式よりも内実を重んずる気風があった。そして、すでに述べた諏訪高女の例にみられるように、学問を愛する気風が強く、教師の研鑽は盛んであった。高島小、諏訪高女、諏訪中の有志が集まって輪読会をやったりもしたという。独学ですぐれた地理の教師となり、生徒に大きな学問的影響を与えた諏訪中学の三沢勝衛のような人や、すぐれた支那絵画論を書いて、アララギ歌人たちに影響を与えた高島小学校教師河西省吾（のちの金原省吾）のような篤学の人が生まれたのも、このような学問を愛する土壌があったからだといえる。また女生徒たちは手織り木綿のかすりの着物に袴をはき、かばんを肩にかけ、白い鼻緒の下駄で登校し、気候のよいときは廊下も校庭もはだしでとびまわる質朴さがあった。

さらに土屋文明がのちに自選歌集『放水路』のあとがきの中で、「島木赤彦の世話で諏訪高女へき

たのは、月給を貰って借金をかえすのが目的であったが、校長（三村安治）の人となりに動かされて、段々教育のことに興味を感ずるようになった」と言っているように、当時の諏訪教育界には、島木赤彦や三村安治のような、土屋文明の教育を理解するすぐれた先輩たちがいた。そして何よりも町の人たちが、高島小の教育を、諏訪高女の教育を信頼していた。

米田利昭も指摘しているように、当時の諏訪には、ここにみてきたような、若く気負った純理派土屋文明を容れる土壌と、文明が腕を振いうる条件があったのである。

土屋文明は、伊藤左千夫の牛舎で働きながら第一高等学校へ通っていた日に、若き斎藤茂吉や中村憲吉らアララギ派の俊秀の仲間に、最年少の同人として参加して歌人としての出発をしたことや、東京大学文科の学生、豊島与志雄、山本有三、久米正雄、菊池寛、芥川竜之介らによる「第三次新思潮」に、井出説太郎の筆名で参加したことにみられるように、多様な青春の経験をもっていた。そして文明はまた、群馬県の農村に生まれ、質実の少年期を過ごした農民の子でもあった。それゆえに、女生徒たちが「土屋先生は普通の先生とは違うという印象」を受けたように、型にはまった教師ではなかった。そのような土屋文明であったがゆえに、諏訪の教育界と町民と生徒の期待にも応ええたのであろう。この若き文明と諏訪との出会いは、明治期における若き藤村と小諸との出会いにもたとえられよう。

伊藤千代子は、そして平林たい子も、このような諏訪高等女学校のなかで学び、このような土屋文明らに教えられたのであった。中洲小学校で培われた千代子とたい子の個我が、諏訪高女でいっそう豊かなものに育っていった背景には、このような教育的状況があったのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c